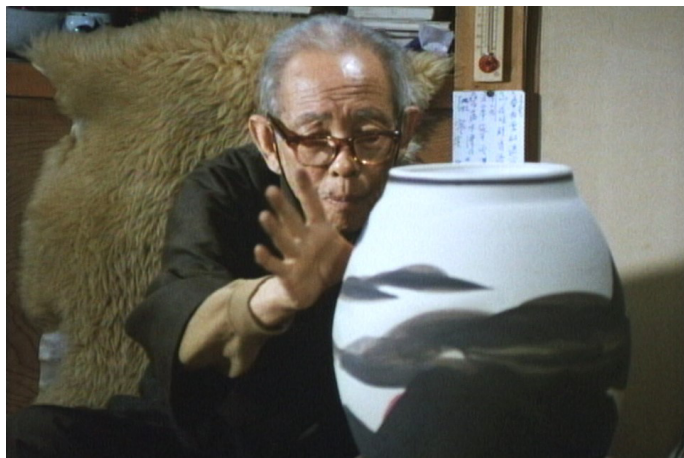


文部省選定 〔推薦〕日本映画ペンクラブ 優秀映画鑑賞会
第38回芸術祭優秀賞 1983年教育映画祭最優秀作品賞・文部大臣賞
1983年キネマ旬報文化映画ベスト・テン第2位

重要無形文化財保持者、陶芸家・近藤悠三。その作品は独自の力強い染付を特色とする。映画は染付一筋、呉須一筋にやきもの人生を歩んできた近藤の技と、磨きぬかれた芸術論、人生論を記録した。



明治35年、京都の清水に生まれた近藤は、小学校をでるとすぐ五条坂にあった京都市立陶磁器試験場附属伝習所の轆轤（ロクロ）科に入学。「ぼくは、小学校でも図画や手工が一番下手だった。だが人一倍、負けん気が強い子で」と与えられた轆轤に取り組み修業した。ここで若き日の河井寛次郎や浜田庄司に出会う。やがて奈良の安堵村で陶芸の仕事をしている富本憲吉に師事。近藤は富本から「作家になるのだったら陶芸以外の勉強も」といわれて、関西美術院でデッサンや洋画を習い、合間に図書館でトルストイやドストエフスキー等を読み、夜はアルバイトで轆轤をひき、自宅の1坪半の狭い仕事場で自らの作陶にも励んだ。若い頃の一時期、志野や青磁、白磁や瑠璃と、何でも一通り手懸けたが、世に「近藤染付」と呼ばれる独自の染付が生まれたのは40代になってからである。

染付とは、陶磁器の白い素地に呉須（ごす）と呼ばれる酸化コバルトを含んだ顔料で模様を描き、透明な釉薬（うわぐすり）をかけて焼いた藍色の模様のやきものである。以来、近藤はあざみ、ざくろ、梅、山などを主題に、呉須一筋に生きた。この染付に赤絵や金彩を加える工夫を始めたのは50代の終わり頃からで、作品は歳を重ねる毎に華麗な境地をみせ、80歳を超えても創作意欲は少しも衰えをみせず、長年の念願であった富士山を主題にした新しい仕事に取り組んでいる。「いつも一生懸命いのちをかけてやってきた」と語る近藤は、老いてますます若々しい。

記録
35ミリ
カラー／32分

- 企画
（財）ポーラ伝統文化振興財団
- 撮影協力
文化庁文化財保護部
東京国立近代美術館
京都国立近代美術館
富本憲吉記念館
河井寛次郎記念館

スタッフ

- 製作
六鹿英雄
村山和雄
- 脚本・演出
村山正実
- 撮影
村山和雄
- 照明
浅見良二
本橋俊男
長坂 潔
- 音楽
長沢勝俊
- 解説
相川 浩